



# ウィンストン 燦燦

～33 Light Essays about  
Winston Churchill～

草芥

**If they cannot be your friends, let them at any rate be your acquaintances. -Winston Churchill**

私のブクログ「ウィンストンの昼寝」の、本棚のうえにあるエピグラフがこれです。さて、they はいったいなにを指しているのかといえば、books のことです。読書をすすめているウィンストンのことばです。もしうまく本とつきあえなくとも、せめて知り合いにしておけばよい。そのうちなかよくなれるかもしれないぞ、という感じでしょうか。

時代の風潮からして、むずかしい本ははやりません。しかしながら、読みごたえのある本というものは、瞥見ではその価値がわかりませんし、基本的に復読をかさねていくことによってのみ真価を発揮します。とりあえず、これはいい本なのかもしれないとあたりをつけたのであれば、あるいは名著だと謳われているものであれば、知り合いにするに如くはなしです。あわよくば、友人にしましょう。

もちろんここで強調したいのは、ウィンストンの遺した書物一群です。それにチャーチルについて書かれたものは汗牛充棟です。大半は一読に値します。もちろん傑作もあります。ヒトラーを扱った本のほうが数では圧倒しますが、質はダントツでチャーチルに軍配があがります。ここにも、チャーチルとヒトラーの差があらわれています。

とはいえ、ウィンストンについて学ぼうとすれば、英語で読むしかありません。日本人がチャーチルについて知りたくとも、日本語で書かれた良書が少なすぎます。翻訳も、なぜか微々たるものです。というわけでブクログ「ウィンストンの昼寝」では、できるだけ洋書としてのチャーチルを充実させたいなど。まあ、遅々として...

## 読書尚友。

---

人、古人に通ぜず。聖賢を師とせざればすなわち鄙夫のみ、読書尚友は、君子のことなり。 -吉田松陰

読書尚友とは、読書をして古人と会い、古人と対話し、その人に魅了され、その人を私淑する、という意味です。おそらく孟子が言いだしたことばです。いまではやや古風な響きがあるかもしれませんが、すたれてしまっただけではないことばです。読書尚友の気風を、若い人が引き継いでいく必要があります。私たちは、死者である古人にはもう会えません。しかし読書を通じてならば、いくらでも会えます。私たちもいつかは死にます。ずっと先の未来、誰かがあなたに会いに来てくれるかもしれません。読書という人間の営みがつづくかぎり、それが可能となります。

古人といえど大仰に聞こえます。もうこの世にいない故人だととらえればよいでしょう。ウィンストン・チャーチルは、1874年に生まれ、1965年に死んでいます。二十世紀を代表する政治家です。私が生まれるころには、すでにウィンストンは他界していますので、私にとってはまぎれもなく古人です。音声や映像でも、ウィンストンに出会うことはできますが、やはり読書尚友のひとつことに尽きます。日本の一般読者層において、どれほどチャーチルが読まれているか定かではありませんが、いずれにせよ、読書尚友の相手として不足はありません。こんないいかたをするとウィンストンならば、宣伝が生ぬるい！ と喝をとばしそうですが...

## 剛胆の人。

---

剛胆なる処を学ばんと欲せば、先ず英雄の為す処の跡を観察し、且つ事業を玩味し、必ず身を以て其事に処し、安心の地を得べし、然らざれば、只英雄の資のみあつて、為す所を知らざれば、眞の英雄と云うべからず。 -南州遺訓

剛胆といえは、胆力のある人物のことをいいます。もうあまり使われなくなったことばですが、本来、月旦評に欠くことのできない資質のひとつです。西郷隆盛のような男を想像すれば、まずまちがいはありません。大局的な判断をくだすには、ものごとに動じない度胸がいます。胆力のある人物でなければ、そもそも政治家など務まるものではありません。

西郷とチャーチルは、タイプとしては似ていません。が、どちらも文句なしの英雄です。いずれも剛胆の人です。さて、その剛胆なる処を学びましょう。まず観察です。幸い、西郷南洲よりも、チャーチルのほうが圧倒的に資料が充実しています。ウィンストンの為した処、つぶさに観察できます。時間はかかるかもしれませんが、これだけでも示唆に富みます。永田町に生息する小人の群れを観察しても、ストレスになるだけです。

ついで、英雄の為した事業の玩味です。たとえば西郷であれば、よく征韓論が議題にあがります。玩味するのはむしろ楽しいかもしれませんが、戦後日本のありがちな偏向史観を払拭さえできれば、ものごとの道理は見えてきます。ウィンストンでもっとも議論になるのは、第二次大戦回顧録の第一巻のくだりでしょう。ただここも、欧米研究者の微細な論にふりまわされなければなんとかなります。極論すれば、西郷もチャーチルも、国家の柱石としての英雄なのです。もっとも、私には身を以て其事に処し、安心の地を得ることはむずかしいですが...

## 尋常の外。

---

英雄の行為は時として尋常の外に飛び出づることあり、時勢は人を作る者なれど、人亦時勢を作る者なり。 -山路愛山

ウィンストン・チャーチルは尋常の外にいた男です。日本の学校教育のことばでいえば、完全に規格外れです。とうじの英国では、パブリックスクールをでてオックスブリッジに行くというのが主流でしたが、ウィンストンはハロー校は出たものの、大学には進んでいません。大学をですに首相になったユダヤ人のディズレーリなどもありますが、英国エスタブリッシュメントの世界でも、やはりウィンストンは異端でした。その異端が、国家の柱石として救国の政治家として大成したわけです。

時勢が人をつくる、といいます。たとえばカール・マルクスなどは典型的です。卑近な例をいえば、現代日本のマスコミを賑わせている人々のほとんどは、ただ時流に合致したピエロにすぎません。軽薄の時勢のなせるわざです。

ウィンストンも時代の子です。二十世紀を代表する政治家というにふさわしい人物であるものの、価値観のベースは十九世紀の英国にあります。よくいわれることですが、ヴィクトリア時代の恩恵をたっぷり吸いこんで育ったのが、ウィンストンでした。もともと厚かましい男ですが、帝国主義の時代に生きた英国人ならではの、という要素も無視できません。歴史をふりかえれば、時勢が人をつくったという側面のチャーチルを発見するのはたやすいことです。

いうまでもなく、時勢をつくったウィンストン・チャーチルこそが面目躍如なのですから、とうぜんそこに着目しなければなりません。

テオドール・モムゼンの『ローマの歴史』を読むと理解がすっきりしますが、カエサルを考えると参考になるかもしれません。ウィンストンは、カエサルをよく意識していました。カエサルのような男を生み出したのは、まぎれもなくあの時代のローマです。しかしながら、共和制ローマの限界に気づき、それを変革しようと大胆な行動にでたのがカエサルです。ユリウス・カエサルは、時勢をつくった人です。このように、気軽に人物をあてて対比させると、ウィンストンがよりいっそう輝きます。いろいろと、あなたの興味のある日本人で比べてみるのも一興でしょう。

禿げまして。

---

**...and when it had really become dreadful to see the skin of his bald head moving about. -George Eliot, *Middlemarch***

あるフランス人ジャーナリストがものした『禿頭礼讃』。禿げに関する考察が綴られています。というよりも、個人的な毛髪へのノスタルジーといった程度で、さして邦訳された必要性などみいだせません。ただタイトルのよさから、ついつい手を伸ばしてしまい、とある病院の待合室で読んだりしたのを記憶しています。表紙がめだってしまったものの、そんなことを気にしてもいられず...

禿頭について、私がいいたいことは二つです。一：禿げが嫌われるのではなく、禿げを気にしすぎる男が忌避される。二：ウィンストン・チャーチルは、禿頭がよく似合う！ 前者はどうでもいいことかもしれませんが、後者は見逃せません。ウィンストンは、各年代の写真をみていけばよくわかりますが、30代が分岐点でありました。厳密には20代後半なのかもしれませんが、そんなことはまあどうでもよろしい。とにかく30代のウィンストン、飛躍の年代となります。ロイド＝ジョージと意気投合し、改革への情熱に身を焦がすのもこのころです。結婚は34歳。とうじとしては晩婚ですが、幸福な結婚となりました。1911年から海相として、海軍省を改革しようと激震をもたらします。ウィンストンにとって、侵食された禿頭のことなどあまり眼中になかったようです。そこも魅力です。禿げに悩むチャーチルなど、とてもではないですが想像できません。

米国の歴史家の筆による、*Troublesome Young Men* という本の表紙は、蔵相時代のウィンストンです。いっしょに歩いているのはボブ・ブーズビー。ブーズビーにとってはこのときが最良の時であったのかもしれませんが。この写真、なかなか素敵です。ウィンストンの禿頭が文字どおり耀き、笑顔もいい。まだ山高帽子の時代です。アイコンニックといえは大げさですが、大臣が歩くだけで絵になるというのは、民主主義の成熟として評価されるべきことでしょう。衆愚政治には必要がありませんが、大臣たるもの風格がなければならないのです。笑顔のなかに漂うような、そんな風格であればなおよし！

禿げましあつて。

---

It is delightful to see the skin of his bald head moving about !!

禿げまして禿げましあつて晩夏光 -草芥





邪魔するやつは...

---

**I never saw him tired. He was absolutely totally organized, almost like a clock. He knew how to husband his energy, he knew how to expend it. His routine was absolutely dictatorial. He set himself a ruthless timetable every day and would get very agitated and cross if it was broken. -Bill Deakin**

ウィンストンの執筆活動をアシストした一人、ディーキンの回想より。

まずタフ。やはりタフ。疲れたところなど見せない。完全に自分をコントロール。決めた時間どおりにきびきびと処理していく行動力。ウィンストンは、自己のエネルギーをどのようにつかえばよいかを熟知しており、そのバイタリティーを無駄にするようなことはなかった。自分に課したタイムテーブルに厳格で、邪魔するやつは指先ひとつでダウンさ。。

執筆活動の成功の秘訣はこういうところにあるのでしょうか。アシスタントに恵まれたということもあります。さらにいえばアシスタントたちに刺激をあたえ、人格で魅了する男であったからこそ、名著が誕生したわけです。ただその前提として、体力のみならず、時間をうまく制御できたからこそ、あれほどの量の文章を産みだしていったのです。自分に鞭をうつ意志力が不足していればどうにもなりません。

ここはひとつ、ruthless という単語に着目してみましょう。残酷という意味ですが、もうちょっとていねいに説明すると、自分の望むものを手に入れるためには多少周囲に迷惑をかけてでもやる、という積極的なことばです。端的には「毅然」と訳すのがよいでしょう。近年、ポール・ジョンソンがチャーチルの略伝を上梓しています。ページ数にして200もありません。書きたいことの大部分をバッサバッサと切り捨てていったので、ruthless な姿勢で挑むしかありませんでした。簡にして約。枯れた作品となっています。年齢を考慮しての圧縮だったのでしょう。

秋霜のような厳しさは、己を律するに必要なことです。ウィンストン・チャーチルのキャラクターを掴むのに、ruthless は不可欠な要素です。

## アンコール。

---

さて、われわれが交渉をもち、あるいは交際している人間が、不快な態度ないし腹の立つような態度をとった場合、今後幾度か同じ態度を、しかも輪をかけてとられても我慢する気もちになるくらいに大事な人間であるかどうかを、心に問うてみさえすればよい。その人がそれほど大事な人間なら、何を言ってもまずどうにもならないのだから、それについて言うべきことはあまりない。小言を言うなり、言わぬなりして、事を水に流すほかないが、しかしそれはもう一度やってくれと頼んだも同然だということを覚悟するがよい。 -ショーペンハウアー

なかなか応用がきくパッセージです。ここはひとつ、バッハを弾かせればピカイチなピアニスト、グレン・グールド氏にもご登場ねがいましょう。

- 一。グールドが演奏中に鼻歌をまじえること。
- 二。チャーチルがしょっちゅう遅刻すること。
- 三。グールドが楽譜どおりに演奏しないこと。
- 四。チャーチルが昼間から酒をのむこと。
- 五。グールドがホロヴィッツの悪口ばかりいうこと。
- 六。チャーチルがベッドでしか朝食をとらないこと。
- 七。グールドが風呂のなかで手袋をはめていること。
- 八。チャーチルが人のはなしをさえぎること。
- 九。グールドが突然深夜に電話攻撃すること。
- 十。チャーチルが演劇鑑賞中にセリフを先走ること。

などなど。

言近くして、意遠し。

ウィンストンの妻クレメンティーン。

きっと、ショーペンハウアーに首肯するはず。

## アングロフィル。

---

**Life, it seemed to him, would be intolerable if he were not the greatest among men: not one of the greatest, but quite definitely the greatest. -André Maurois, *Disraeli***

フランスの作家アンドレ・モーロアによるディズレーリの伝記。仏語が英訳され、1928年ごろ英語圏においてベストセラーとなりました。いまでも古書で安価に入手できます。英語も平易です。日本ではディズレーリにスポットをあてるような書物は皆無にひとしく、こうした一般向けの伝記がわが国にはなかなか普及しません。歴史学者の閉鎖性と歴史小説の安易さが、日本人による本格的な伝記文学の醸成を妨げているのは事実です。モーロアのような筆さばきは、21世紀にも待ち望まれます。

モーロアは正真正銘のアングロフィル（英国びいき）ですが、グラッドストーンではなくディズレーリを好みました。ウィンストンも、グラッドストーンの演説を読んではいますが、ディズレーリ派です。ウィンストンの父親は著名な保守党の政治家でしたが、ディズレーリの子飼いといってもよく、チャーチルの保守党としてのルーツは、こういうところにあります。ディズレーリの進取の気質は、ウィンストンにもうけつがれています。二人の共通項をさぐることは愉快なことです。

とくに、オンリーワンよりナンバーワンを志す気風は、二人ともかなりはりあっています。幼少期のそれぞれの伝記を紐解けば、ああどっちもどっちだなあと実感されることでしょう。少年は、まず大志を抱いてこそ大成します。とはいえ、ウィンストンとディズレーリのちがいにも着目してみましょう。たとえば、淑女への対応。ベンジャミン・ディズレーリは、ヴィクトリア女王との会話が巧みで、お世辞の達人で、女にモテるタイプでした。ウィンストンは？ さあ...

**Winston may in your eyes and in those with whom he has to work have faults, but he has the supreme quality which I venture to say very few of your present or future Cabinet possess--the power, the imagination, the deadliness, to fight Germany. -From Clementine to Asquith**

第一次大戦時、ウィンストンは海相として指揮をとります。1915年のガリポリ半島での悲劇は有名ですが、この責任をとらされたのがウィンストンでした。手紙はクレメンティーンから首相アスキスに宛てたものです。どうかウィンストンを更迭しないでいただきたい、きっと閣僚の一員として国家のお役に立てるはずで、と力説しています。しばしば引用されるこの妻の手紙、私もとても気に入っています。女にも、時にはこういう敢言も必要です。もっとも、保身を重視したアスキスにはうけいれられませんでした。

引例をみて、第二次大戦開戦前夜のことだろうかと思いたる人もいます。たしかに、チェンバレンに宛てたチャーチル夫人のことばと仮定してもそのまま通用しそうな文面です。英国はさらに強大になったドイツと戦争することになります。チェンバレンは醜態をさらし、さいごまで希望的観測にしがみつきました。第二次大戦は、ウィンストン・チャーチルが首相でなければとてもさいごまでのりきることはできなかったでしょう。第一次大戦時の経験が、戦時の首相というものを育てたといえるかもしれません。その意味でいえば、平時にしか適応できなかった政治家アスキスの第一次大戦での最大の功績は、若きウィンストンを海相の地位に就けたこと、というべきです。

## 絵筆と帆布。

---

**Happy are the painters, for they shall not be lonely. Light and colour, peace and hope, will keep them company to the end, or almost to the end, of the day. -Winston Churchill**

わるい政治家には生まれつき、厚顔無恥が性格としてそなわっています。とはいえ、よい政治家にもこの資質がいます。無恥ではいけないので、恥を偲んで厚顔でいる、とでもいいかえておきましょう。人は恥を知らなければ人として生きていく資格などありませんが、恥を忍ぶのも必要です。政治家があまりにも繊細では困ります。恥を偲んでときにはふてぶてしく振舞うことも大切なことです。政治には持続性がいます。畢竟、自己の行動が国益に叶っていれば厚顔無恥であってもよいわけです。さらに踏みこめば、厚顔無恥でなければ政治家としては生きていきません。

ウィンストン・チャーチル。もちろん厚顔無恥です。西郷隆盛は政治家にはなれませんでした。西郷さんに厚顔無恥はあってはならないことです。薩摩に帰ったのも、とうぜんの帰結でした。ウィンストンには、厚顔無恥がしっくりきます。私はよい意味でいっていますが、チャーチルがきらいな人々にとってはわるい意味となります。チャーチルについての本は膨大にありますが、著者たちがここをどのように認識しているか、意識しながら読んでみると読書がはかどるはずです。

政治の世界は政治家をくたくたにさせます。ウィンストンが趣味として絵筆を握ったことは、政界の阿鼻叫喚から逃れる一助となりました。とくに、油彩画にめざめたのは1915年、ガリポリの悲劇のあとでした。このときウィンストンが自滅しなくてすんだのも、油彩のおかげといえるかもしれません。ただ、趣味を消極的なものとしてとらえるのはよくありません。ウィンストンはただ、自分の好きなことに忠実であっただけのことです。なにか趣味がなければ精神的にまいってしまうから、という理由で絵をはじめたのではなく、キャンバスのまえに立つことの魅力を知ったからこそ、趣味になったのです。よくしゃべる男にも、静かな時間は必要です。ウィンストンにとっては、油彩がその大切なひとときとなったわけです。

ウィンストン呼ばわり。

---

**After all, next to Winston... I know more about the conduct of war than any of them [in the cabinet], nor to speak of my greater knowledge of European affairs and my authority with the Dominions. And if I am just senior to Winston in actual years, I am, I think, a good deal junior in body... -Leo Amery, 1939**

俳人に坪内稔典という人がいます。ねんてんさんです。人々は親しみをこめて、ファーストネームを音読みしているわけです。ふつう、尊敬して名前を音読みにし、伊藤博文をいとうはくぶん公、などといいますが、ねんてんさんはその逆です。

政治家として、なれなれしく下の名で呼ばれるということは、じつは名誉なことなのです。サッチャーは、チャーチルのことをいつもウィンストンと呼んでいました。フォークランド紛争のとき、第二次大戦の指揮をとったチャーチルのことをつよく意識していた、と回顧録にあります。英国の著名人は日記や手紙をせっせとつづっていましたので、チャーチルの名前がでてくるとき、たいていはウィンストンです。ボールドウィンだとSB、ロイド＝ジョージだとLG、などとなりますが、チャーチルは Winston! ちなみにサッチャーはサッチャーです。「鉄の女」とは呼んでも、まずマーガレットとは...

第二次大戦時、チャーチルは海相として閣僚に復帰します。そのとき、伝説では海軍省から英国の艦隊に、"Winston is Back" というシグナルが送られたといわれています。真偽不明ですが、いずれにせよ、"Churchill is Back" では絵になりません。そこどころがポイントなのであって、チャーチルはじつにキャラが立ちます。ひるがえって、日本の政治家をみわたしてみましよう。ファーストネームで激励と親しみをこめてその名を呼びたくなるような政治家がいますか？  
もしいるとすれば、私たちはそういう政治家を大切にしなければなりません。政治家は、見識よりもまず人格です。

たんぽぽのぽぽのあたりが火事ですよ -捻典さん  
ひまわりをみあげてわかるういんすとん -草芥さん

はだかんぼう。

---

## The Prime Minister of Great Britain has nothing to hide from the President of United States. -Winston Churchill

1941年12月、ホワイトハウスで。ローズヴェルトがチャーチルの部屋を訪れたさい、ウィンストンはバスタブから裸ん坊で米国大統領をお迎えした、というはなしです。ソースはいくつかありますが、厳密にいうと真相は不明です。ウィンストン自身、そんなことをいったおぼえはない、とある伝記作家に語っています。ただ、状況から考えれば、そう発言した可能性は高いといえます。なによりも、あまりにもウィンストンのキャラクターに合致しているため、なんの違和感もありません。当意即妙のウィットですが、これくらいの機転、ウィンストンにとっては日常茶飯事です。本人がおぼえていないと語ったのも、さほど印象にのこるようなエピソードではなかったのでしょうか。（詳しいディスカッションは、R. Langworth, ed., *Churchill by Himself* 2008 を参照）

さてこの逸話、英米関係を象徴しているにとらえ、そこから敷衍していくのも有益です。英国は、米国の参戦がなければ第二次大戦を勝利することなどできませんでした。そのことを見抜いていたのがウィンストンで、なんとしてでも米国を味方につけようと執念を燃やしました。スターリンと手を組んだのも、その流れで把握したほうがすっきりします。他方で、大英帝国を米国に売りわたした、チャーチルのせいで米国は戦争に引きずり込まれた、などという批判もあります。

キッシンジャーのいうとおり、ウィンストンはベストを尽くした、と総括すべきです。日本は日本として、そこから議論をスタートすべきでしょう。

さてこの逸話、男の立ち居振る舞いとしても確認しておきましょう。ウィンストンがもしも裸でいることを恥ずかしがって、うわあーっと叫んでバスタオルにしがみつくような男であれば、英国は早々とヒトラーに屈服していたでしょう。ローズヴェルトもそんな男が首相を務める国を信用するわけありません。もっとも、ローズヴェルトはなかなかチャーチルを好きにならず、大英帝国がきらいで、ソ連万歳の男でしたが...

## めざまし時計。

---

**He was an alarm clock, but he was a rasping one, which made most listeners more anxious to turn it off than to respond to its summons. -Roy Jenkins, *Churchill***

ふつう、人はめざましで起きます。めざまし時計というものは、おしゃれであればあるほどいいのかもしれませんが、カッコだけでは意味がありません。起こしてくれなくては、その存在意義が問われます。耳心地がよければそのまま眠りつづけてしまいます。かといってあまりにも大音量だと、周囲に迷惑です。当人だって、不愉快な音でめざめれば、その日の気分もだいなし....。

たとえ天下泰平といえども、人々に警鐘を鳴らすめざまし時計は必要です。要路にある人が時流に反してでも立ちあがらなければ、存亡の岐路であやまった方向に国家が落ちてしまいます。ただ、めざまし時計は早く鳴りすぎてしまうと反感を呼ぶだけです。

ウィンストンがボールドウィン政権にたてついたとき、その動機がうたがわれ、反撥を呼びました。とくにインドの自治権をめぐるウィンストンは保守反動的なポジションにいましたから、タイミングとしても最悪でした。もっとも、根底には英国社会に平和ボケが浸透していたことが、チャーチルの咆哮がなかなかとどかなかった最大要因です。

ウィンストンはドイツへの宥和に反対した人物として有名です。ウィンストンのみが宥和に反対し、ナチスの脅威を見抜いていたわけではありませんが、政治家としてもっとも声をあげて闘ったのがウィンストンです。ここにチャーチルの真面目（しんめんもく）があります。時流に敏感で迎合するだけの政治家は三流です。輿論を巻き起こす気概なき政治家では、国難に対処できません。ときに早く鳴りすぎてしまっても、国民へのめざまし時計としての役割を果たさなければならないときがあります。



## 瀕死のライオン。

---

**To a policeman who asked him what had happened, he insisted that the accident had been his fault. -Martin Gilbert, *Churchill: A Life***

こちら現場です。たったいま、ウィンストン・チャーチルが車に撥ねられました。全身打撲で流血しています。救急車で近くの病院へ搬送されようとしています。人だかりができていますが、まさかのちの英国首相だとは誰も想像していません。事故を起こしてしまったドライバーは、イタリア系の移民ですが、無茶な運転をしていた形跡はありません。ウィンストンの不注意が原因です。伝説として、タクシーに轢かれたとよく書かれてありますが、タクシーから降りて道を横断しようとしたところをドーン。英国は日本とおなじく車両は左側通行ですが、米国は右側。伝説として、ウィンストンはそのちがいを意識せず、左右確認の仕方を誤った、というジョークがあります。実態はそういうことではなく、ただの不注意です。正確には、どんくさいな...という感じでまとめられます。

以上、1931年、師走のニューヨークからの中継でした。  
ではここからはスタジオです。解説者に聞いてみましょう。

そうですね。なかなか死にませんよね。しぶといです。このあと、しばらくはひどい神経痛に悩まされますが、みごとに復活します。精神的に屈強であるのみならず、やはり体力もあります。交通事故にあったのは不幸ですが、死ななかったのは幸運です。幸運のほうが圧倒的に重要です。もしこのとき死んでいれば、その後の歴史はいったいどうなっていたのでしょうか、などと考えてしまうのが素朴な感情なのではないでしょうか。みなさん、五番街を訪ったなら、ああそういえばここで誰かが車に轢かれたなあ、と思い出してみるのも一興です。もしかしたら、食事での会話が弾むかもしれせん。

## 英国毒珈琲事件。

---

**Nancy: If I were your wife I would put poison in your coffee.**

**Winston: If I were your husband, I would drink it.**

ナンシー・アスター：

もしあなたの妻ならば、私はあなたの珈琲に毒をいれるでしょうけど。

ウィンストン・チャーチル：

もしあなたの夫ならば、私はその毒入り珈琲を飲むでしょうね。

高校生になれば、仮定法を英語の時間に習うはず。仮定のはなしが読めなければ、英文などとても読めません。仮定のはなしを想像できなければ、いいオトナにはなれません。仮定のはなしを楽しめなければ、豊かな会話を満喫できません。ナンシーの敵意もみごとですが、ウィンストンの想像力はもっと上をいきます。男子たるものつねに毒を仰ぐ覚悟で生きていた、ということでしょうか。

この会話のオリジナルは、F・E・スミスだったのでは、という指摘もあります。スミス、のちのバーケンヘッドは、ウィンストンよりもさらにbossy でした。

議場が男性の世界であったころ、おかしい行動をくりかえしたナンシー。野次でナンセンス！ をとばしつづけたナンシー。ナンセンスな政治家ではありましたが、女として男の世界へ突撃した度胸は立派です。ただの社交辞令ですが...

## 毒味。

---

ところが、まもなく、家来のひとりが、一本の木につまずきました。で、棺がゆれたひょうしに、白雪姫がかみ切った毒のリンゴの一きれが、のどからとびだしたのです。すると、まもなく、お姫さまは目をパッチリ見ひらいて、棺のふたをもちあげて、起きあがってきました。 - 『白雪姫』

ナンシーと恋に落ちることはなく、なんとか毒入り珈琲を飲まずにすんだウィンストン。それでも第二次大戦時などは毒を盛られる可能性もあり、暗殺のターゲットになっています。このとき、率先して毒味を買ってでる若者がいました。ヴィクター・ロスチャイルドです。ヴィクターは、首相であったウィンストンに贈りとどけられた食べものや葉巻などをチェック。このときの本職は、MI5でのインテリジェンスでした。慣用表現としての毒味とは、料理の味加減をみることです。ヴィクターの毒味は文字どおりのそれです。タマネギの木箱に爆弾が仕掛けられていたこともあり、ヴィクターはみごとに対処。型破りな男でしたが、戦後は毀誉褒貶の人生を歩むことになります。

ヴィクターがユダヤ人であったことを強調しておきましょう。ウィンストンは父ランドルフの影響もあって、ロスチャイルド家と親密でした。生涯をつうじてユダヤ人の味方であったことは、チャーチルの生涯を物語るに不可欠な要素です。命令されずとも毒味をしてくれるような部下をもつ戦時指導者を、日本も将来もつことができるでしょうか。内閣総理大臣というものは平時であっても戦時指導者です。このこと、一瞬たりとも忘れてはいけません。とうの首相が、そのことを忘却しているとすれば...

1995年の阪神淡路大震災、2011年の東日本大震災。平時でも無能、戦時となれば度しがたいまでの無能である政治家、そんな政治家が日本の首相の地位にいたことは、ただの不運でも不幸でもありません。わざわざチャーチルをもってくる必要もないですが、あらためてよく考えなくてはならないことです。

背をむける男。

---

**What Churchill saw, others did not. The great issues in British politics in the first half of the 1930s were imperial and economic, not strategic. Both were distractions from the growing military crisis. -John Keegan, *Churchill***

有元利夫の絵に、花火の日、というのがあります。花火と月を背にして、木のそばに立ち、なにかを見つめています。誰かを見つめているのかもしれませんが。あるいは、ただ佇立しているだけなのか。どんな感じにでもうけとれる、余韻がいつまでもつづく名画です。美術館でみたときも、この絵だけは立ち去りがたいものがありました。

花火があがれば、人々は空を見あげ、その光景に魅入ります。そんなシーンでも、花火を背にする男。どことなく意味深です。軽佻浮薄に背をむけて生きることはむずかしいですが、たとえ花火があがっていても、もっと大切なことがあるわけで、花火に背をむけていられる男がいなくてはなりません。

人間は、見たいものを見るというよりも、見たくないものはできるだけ見ない、という生きものです。花火は見たいものかもしれませんが、ほんとはもっと大事なこと、直視しなくてはならないものがあるはずです。見たくないものごとをいつときでも忘却するために、人は花火が舞う空を見あげるのでしょうか。

治に居て乱を忘るるべからず。

1874年。

---

**The sufferings which revolution entailed upon the cities were many and terrible, such as have occurred and always will occur as long as the nature of mankind remains the same; though in a severer or milder form, and varying in their symptoms, according to the variety of the particular cases. -Thucydides, *The Peloponnesian War***

トゥキュディデスの『ペロポネソス戦争』は、日本には久保正彰の名訳がありますが、英訳ではリチャード・クローリーのものがある。19世紀後半のヴィクトリア朝の英語で訳されたものですが、いまでも欧米の熱心な読者には愛読されています。手元にある、R.B. Strassler, ed., *The Landmark Thucydides* 1996 は、クローリー訳をマイナー修正したものです。注釈、解説、図版が充実しているので、座右の書にふさわしいできればかと。

クローリー訳の『ペロポネソス戦争』が出版されたのは、1874年。ウィンストン・チャーチル生誕の年にあたります。たまたまのことであって、それがどうこういうつもりはありません。ただ私は、そういう偶然が好きだけです。ウィンストンがプラトンなどを読んだのは知っていますが、トゥキュディデスを読んでいるのか、定かではありません。ウィンストンは、とうじの教養としてはあたりまえのはなしですが、ギボンの衰亡史に魅了されています。ちなみにガンジーも。。

個人的にはギボンよりもトゥキュディデスです。学べるのが圧倒的に多いような気がします。ウィンストンは、マキャヴェリを読んでいたそうですが、韓非子は知りません。ギボンを読んでも東洋の興亡史には無知です。ここらへんはまあいいとして、トゥキュディデスを知らずにその生涯を過ごしたとしたら、なんというもったいない人生を...と、ついつい愚痴ってしまいます...

11月30日。

---

**"Would you rather I didn't talk? If you say so I'll stop. I can STOP when I make up my mind to it, although it's difficult." -Montgomery, *Anne of Green Gables***

安藤裕子の歌に、「六月十三日、強い雨」というのがあります。YouTubeにあります(www.youtube.com/watch?v=QJuR3ZSv500)、6月13日にあがっています。さりげない気くばりです。コメント欄を一瞥してもわかるように、その日が誕生日の人もあります。その人にとっては、さらにさらに、6月13日が特別な日となったことでしょう。

テオドール・モムゼンは、1817年11月30日に生まれました。ローマ史の大家です。長谷川博隆による訳によって、ついに日本語でも読めるようになりました。独語や英訳は、ネットで自由に読むことが可能となっています。さて、モムゼンですが、その文学的功績が評されて、1902年にノーベル文学賞を受賞しました。ノンフィクションとしてこの賞が贈られたのは、この百年をふりかえってみていえることですが、めずらしいことです。

その51年後、ウィンストンもノーベル文学賞を受賞しています。翌年はヘミングウェイです。ウィンストンもモムゼンとおなじく、歴史を書いて文学賞をもらっています。劇作家や小説家、あるいは思想家や哲学者、そういう顔ぶれを主役にする文学賞も大切ですが、歴史を文学だととらえ、歴史家に文学賞をおくことも大切です。歴史は文学を超越してしまうものですが、文学が歴史を軽視してしまえば文学は滅びます。

なんとなく、ウィンストンとモムゼンが誕生日をおなじくし、ともにノーベル文学賞を授与された事実は、うれしいことです。家族や恋人や友人、近しい人の誕生日を意識することはもちろんのことですが、自分からは遠いところにいる、いつも意識している人の誕生日や命日を意識すると、生活の質が向上します。たとえば『赤毛のアン』を読んで育った人、モンゴメリーも、1874年11月30日生まれですよ。

愛情一本。

---

**I was very disappointed but I suppose you were too busy to come. -Winston Churchill**

ウィンストン十歳。父親ランドルフへ宛てた手紙。こういう文面が、ウィンストンの両親へ綴る日常的風景でした。日本と英国では、子育てへの考え方が根本的にちがいます。幕末に日本を訪れた外国人たちが口にしたのは、日本の子供たちがいかに大切にされているか、でした。英国の大人たちの子供への視線は、いまでもそうですが、日本人よりも冷めています。さらにウィンストンが育ったヴィクトリア期ともなれば、躰がきびしい時代です。上流階級では母親が子供の世話をしないのがふつうでした。

そういった観点をふまえても、ウィンストンの幼少期は不遇です。両親からの愛情をストレートに浴びて育った、とはとてもいえません。いまの日本人の感覚からすれば、よくグレなかつたと思います。まあ、若干グレましたが...。ネグレクトということばが定着していますが、それをそのままウィンストンの幼少期にあてはめてもさして齟齬はないかと思えます。もっとも、ウィンストンだけが愛情不足で育ったのではなく、多かれ少なかれ、こういったことはこの時代の実情でした。

ウィンストンの幼少期、たっぷりと愛情をそそいだのは、乳母のアン・エヴェレスト。ウィンストンが少年としての、男としての自信を得たのは、父親への尊敬とアンにもらった愛情のふたつでした。母親からの愛情もうけていますし、どちらかといえば母親似なのでしょうから、ジェニー・チャーチルの存在を無視してはいけませんが、アンがいなければまともに育つことはなかつたと断言できます。足沢良子『チャーチル』1995（初版1981）は、児童むけの伝記ですが、アン・エヴェレストが特筆されています。女性ならではのこだわりとっていいのでしょう。母性というものがなければ子供は育ちません。ウィンストンの伝記を紐解いても、それが例外でなかつたことがうかがえます。

## 凋落の四巨頭。

---

**Few historians would now accept uncritically the essentially propagandist view of his relations with Roosevelt promoted by Churchill. -David Stafford, *Roosevelt and Churchill***

チャーチルをのぞけば、二十世紀を代表する政治家はローズヴェルト・スターリン・ヒトラー・毛沢東。毛沢東を絶賛してきたのが日本の戦後民主主義です。アホとしかいいようがありません。スターリンは、いまでもカリスマ的存在で、秘かに寵愛している日本人学者はいくらでもいるでしょう。ヒトラー。この人物を溺愛するもの、日本にはごまんといます。ほぼ自動的にアンチ・チャーチルとなります。さてローズヴェルトですが、私は大嫌いです。日本でも、ローズヴェルトを激賞する知識人がいますが、そういう人のほとんどは、アンチ・チャーチルです。したがって、日本の出版業界ではウィンストン・チャーチルの翻訳がなかなかできません。たとえばマーティン・ギルバートの膨大な伝記など、黙殺されています…。

いずれの四人とも、再評価がくりかえされることとなりますが、基本的趨勢としては凋落の一途をたどるはずです。ヒトラーに関しては、逆転現象が起こることもありえます。なぜこのような変態が生まれたのか、人々の関心はそこにあります。米国の歴史家たちはローズヴェルトの地位を不動のものとするべく、これからも礼賛本を量産するでしょうが、米国の衰退とともにその勢いも衰えるはずです。チャーチルの見直し論もこれからいくらでもでるでしょうが、ウィンストンは批判されればされるほどその真価を発揮します。真珠湾攻撃についての資料が公開され（おそらく永久にされないのでは…）、日本人がチャーチルを猛攻撃できたとしても（するべきですが）、ウィンストンは二十世紀を代表する人物として、その座をゆずることはないでしょう。

日本人が苦手とする、国益。ここがわからなければ、ウィンストンの足跡を理解するのも困難です。スターリンやローズヴェルトとの関係性も、大英帝国の国益というものを、ウィンストンがどのように捉えていたのかをつねに意識しなくてはなりません。さらに、ウィンストンの筆は走りすぎることもしばしばで、どこからがリップサービスなのが判然としないことがよくあります。インタビューできるものなら、本音ではローズヴェルトとスターリンをいったいどのように認識していたのか、訊いてみたいものです。

ウィンストンはほとんど登場しませんが、ヘインズ&クレア『ヴェノナ』2010など、ここで述べた問題意識への一助にもなります。



## 鞭打ちの刑。

---

**Naturally I am biased in favour of boys learning English. I would make them all learn English: and then I would let the clever ones learn Latin as an honour, and Greek as a treat. But the only thing I would whip them for would be for not knowing English. I would whip them hard for that. -Winston Churchill**

日本において英語を強制的に習わされると、苦痛を感じる子がいてあたりまえです。動機がそもそもないので、文法を学ばされてもなんのための勉強なのかしっくりきません。ウィンストンは、ラテン語でそういう反感を抱き、そこで躓きます。それでもハロー校では師にめぐまれ、母国語である英語力をめきめきとつけていきます。やがて演説家として、文筆家として、その名を馳せるウィンストン。このとき鍛えられた経験は貴重でした。以後、国語力に磨きをかけていき、口述筆記の達人へと変貌します。演説の草稿に手を抜くようなこともありませんでした。

さて、日本人の私たちがここから導きだせるオーソドックスなものは二つ。まず、母国語である日本語を徹底的に学ぶこと。小学生で英語をやるなど論外です。徹底的に漢字や熟語をおぼえていくべきです。できれば論語などを素読すべきです。若いころから漢文に接していれば、ことばの中味に注目するようになり、おのずと格調の高い日本語が書けるようになります。もうひとつは、英語です。チャーチルについて学びたければ、息の長い努力がいります。英語とも、うまくつきあっていくしかありません。邦訳に依拠するのみではもったいないことになります。よほど苦手でないかぎり、英語で読むのが本道です。と、ウィンストンもきつと鞭を打っているのでは。。

偏見をもって生きる。

---

**Prejudice is of ready application on the emergency; it previously engages the mind in a steady course of wisdom and virtue, and does not leave the man hesitating in the moment of decision, sceptical, puzzled, and unresolved. -Edmund Burke**

バークのいう偏見は、深遠です。日本語としての偏見はわるい意味でしかつかいませんが、人々に受け継がれてきた伝統や慣習や道徳というものが凝縮された叡智、というふうにご覧ください。人間の合理的判断（理性）よりも過去からの遺産（偏見）を重視したがゆえに、バークはフランス革命を否定したのです。『フランス革命の省察』が古典として色褪せることはないでしょう。

ウィンストンがヒトラーの台頭に警戒心をつよめたのも、バークのいう偏見があったからです。英国は、欧州を支配する強国の登場をなんども阻止してきました。フェリペ二世、ルイ十四世、ナポレオン、ヴィルヘルム二世、ヒトラーという感じで顔ぶれは変わります。スペイン、フランス、ドイツと、浮上する国も時代とともに変化します。英国は、どこの国であれ、欧州の覇権を握ろうとする国の浮上を潰しにかかります。ウィンストンも、その流れを踏襲したにすぎません。

英国の偏見というものが、ウィンストンに地政学を教えたのです。バランス・オブ・パワーは古びた概念ではなく、これからも生き延びていく偏見といえるでしょう。第一次大戦後、英国はむしろフランスの野望に警戒します。ウィンストンは、フランスをいじめすぎるとドイツへの牽制が効かなくなることを恐れました。果たして、フランスは平和ボケ国家へと墮落します…。

ウィンストンはバークの演説に学んでいます。時を隔てて、ともに祖国を守るために演説で火を吐いたバークとチャーチル。そんな光景を歴史としてながめることができるのも、英国史の魅力です。

## チャーチル対トルストイ。

---

理念とは、人間がそれを具体化したときに、初めて有効となるものだ。この点については、マルクスのような唯物論者だけでなく、ドストエフスキーのような観念論者も間違っている。要するに、思考は現象より重要であり、思考は現象に先行する。さらに言えば、観念が人間にどう作用するかより、人間が観念をどう操作するかが重要であり、現実的であるのだ。 -ジョン・ルカーチ『ヒトラー対チャーチル』

ドストエフスキーが観念論者であったとすれば、トルストイなどはもっと愚かな決定論者です。ウィンストンがもし、ヒトラーのドイツと最後まで戦い抜くという覚悟をもっていなければ、歴史はどうなっていたでしょうか。英国が1940年の段階でドイツに屈服していた可能性はおおいにあります。ハリファックスなどはそういう敗北主義者でした。トルストイなら、最初からヒトラーが挫折するのはわかっていた、などと豪語するかもしれません。人々の意思の総和がヒトラーをつくりだし、そのヒトラーを滅ぼした、などとカッコつけるのかもしれませんが。そんな幼稚な態度だから、ナポレオン戦争を戦史として語るができなかったのです。なのに、あの時代の人々の心象風景を、作中の人物をとおして巧みに語っています。『戦争と平和』は、ナポレオン戦争について考える作品ではなく、その時代の人々の息づかいに近づくための小説です。その意味において、傑作といえるでしょう。

人間の精神を無機質なものとみなし、社会科学的な分析で歴史学を喧伝するのが学者の通弊ですが、日本では、ウィンストン・チャーチルという人物と格闘した末の歴史や伝記というものは、いまだにありません。日本の戦争を考えるにしても、たとえば敵であった戦時指導者としてのチャーチルに迫らなければ、全体像すら掴めません。人物で語る歴史という、人間性に根ざした物語の復権が、いつの日か来ることを信じて。。

## 戦争と平和。

---

**If the circumstances are such as to warrant it, force may be used. And if this be so it should be used under the conditions which are most favourable. There is no merit in putting off a war for a year if, when it comes, it is a far worse war or one much harder to win. -Winston Churchill**

単純な二元論的な発想は危険ではあるものの、戦争を考えずに平和だけを唱える人はそれ以前の問題で、人間として未熟です。日本が先の大戦で敗北に屈したのは事実ですが、反省ということばを繰り返して習慣化したところで、ただの観念的平和主義者にしかなれません。「戦争と平和」について考えることは人としてのマナーです。端的にいえば、戦争を語ることのできない政治家に国政を担う資格なし、戦争を語る政治家を嫌悪する有権者に政治を語る資格なし、ということです。

ウィンストンの『第二次大戦回顧録』。第一巻がもっとも議論を呼びます。ミュンヘン宥和をせずに1938年の時点で戦争をしていれば、ナチスの暴走をくい止められたのではないか、というのがチャーチルの主張です。ここではその議論の是非ではなく、国際政治の流れにおいて、ときに戦争も必要なのだという政治の思考そのものに注目しましょう。日本ならば、日露戦争の開戦は一ヶ月でも早かったほうがよかったのかもしれない。開戦が遅れば遅れるほど、ロシアに有利なのは明白でした。

国家が戦争に踏み切ったからといって、必ずしも平和が壊れたということにはなりません。戦争も辞さない覚悟を、政治家が政治家の魂としてもっていなければ、国は滅びます。すでに若い世代はさっさと左翼史観を脱却して、戦争と平和というものを真摯に考える時代となりました。ウィンストンをあなたの教師につけてしまえば、とんでもなく刺激的なことになりますよ。。

## 真によいもの。

---

結婚生活七年後のピエールは、自分は悪い人間ではないという、うれしい、確固たる自信をえた、そしてそう自覚したのは、妻の中に映し出されている自分を見ていたからだった。自分の中には、彼はすべてのよいものと悪いものがまじりあい、たがいに影を落とし合っているのを感じていた。しかし妻に映っている彼の映像は、真によいものばかりだった。

-トルストイ『戦争と平和』

ウィンストンが結婚するのは、34歳です。ブレニムの大邸宅は、先祖にあたるマールバラ（ジョン・チャーチル）のために建てられたものですが、ウィンストンはここで産声をあげました。プロポーズもここでしています。妻となったクレメンティーン。三女のメアリーが読みやすい伝記を書いています。どうい女性だったのか、わかるようなわからないような、ちょっとつかみにくい女性です。ウィンストンのキャラクターを知っていれば、ふつう、よくあんな男といっしょに生きていけるものだ...、と感じる女性もすくなくないはず。チャートウエルの邸宅も、妻に相談せずには買っています...。いずれにせよ、ウィンストン・チャーチルの妻がつとまったのだから、すごい女性であったことはたしかです。

ウィンストンは、もともと人に対して敵意からはいりません。人のいいところを積極的に評価していくタイプです。政治家として、個人攻撃をするタイプでもありません。議論そのもので闘う政治家です。とうぜんながら、自分のよいところを見てくれる女性でなければ、ともに人生を歩んでいくことなどできません。クレメンティーンは、ウィンストンのよいところを真正面からみつめることのできる知性と度胸のある人でした。もしもこの稀有な人生の伴侶がいなければ、ウィンストンの政治生命はもっとはやく潰えていたのかもしれない。

## 歴史を語る政治家。

---

**The exception was Winston Churchill. With his strong sense of history, he realized some kind of fatal watershed was being reached. -Paul Johnson, *Modern Times***

1919年。ポリシェヴィズムへの激しい抵抗をしめたのが、ウィンストン・チャーチルでした。後世からみれば、このときのウィンストンの行動をためらうことなく評価すべきです。ここでは歴史そのものの文脈ではなく、ウィンストンの歴史観に着目しましょう。政治家ほど、歴史観が問われる職業はありません。ところが日本でそのように捉える人は少数派です。政治家の教養は、国家に直結していなければならず、歴史への深い愛着と興味なくして文明や国家を論じられるわけありません。これほど豊穡な国史をもつ日本であるにもかかわらず、歴史家という肩書きをもつ人があまり尊敬されないのは遺憾です。

幕末の志士たちが頼山陽を熟読してその国家観をやしなったように、ウィンストンもギボンやマコーリーを耽読して英国の文明というものに思いを馳せました。政治家であったウィンストンは、みずから筆をとって歴史を書きました。ペンは剣よりも強し、を知悉していた男です。『第二次大戦回顧録』は、のちの歴史家たちを意識した同時代史ですが、いまでも読むに値します。否、読まずしてあの戦争を語るなかれ、です。ウィンストンの文筆活動はすさまじいばかりに旺盛でしたが、その根幹には歴史への愛着と祖国を担うものとしての自負があったればこそでした。

そう遠くない将来、日本の政治家が第二次大戦を堂々と語り、チャーチルの論じた歴史に挑むような日がくるはずですが。それは反英米主義でもなく、アンチ・チャーチルでもなく、日本人としての歴史をストレートに世界に投げかけられるような、くったくのない素直な世界史となります。いつまでもアングロ・アメリカが、戦勝国としての特権的な地位に胡座をかくことなど許されません。と、ウィンストンへの挑戦状。。

1965年。

---

**The end of the British Empire, whatever psychological effect it may have had on the British people, did not for the most part arouse passionate political debates. -James Joll, *Europe since 1870***

1965年。日本でいえば、東京オリンピックを終えた高度成長の只中です。ビートルズが世界を席捲し、ベトナム戦争での北爆がはじまるころ、英国は帝国の解体と精算をたんと進めていきます。戦後日本人の精神の荒廃がひどくなっていくのは、1960年代後半からかもしれません。いま思えば所得倍増などはナンセンスですし、大学で暴れまわった団塊の世代の愚行にも首を傾げるしかありません。1970年の万博の余波が、三島由紀夫の自決の衝撃をほぼかきけしますが、それもこれも、高度成長という経済に偏った歪な日本人の精神の弛緩に問題があったのでしょう。

そういえば昭和四十年は、「海ゆかば」で有名な信時潔の歿年でもあります。戦後日本が戦前と断絶したのは、1965年だといってもいいのかもしれませんが。一人の死は、ただ一人の死でしかありませんが、その一人になにかを象徴させるということはありません。英国にとって、1965年のウィンストンの死は、大英帝国の終焉そのものの象徴となりました。大英帝国を護るために生き抜いてきた男は、大英帝国とともに、静かにこの世を去って行きました。さすがは昼寝の達人、90歳の大往生です。

1月24日。

---

臨終の時は他念有ることなかれ、唯だ君父の大恩を謝して瞑せんのみ。是れ之を終を全うすと謂う。 -佐藤一斎

人は生まれる日も死ぬ日も、自分で決めることはできません。たとえこの日に死ぬと決め自決しようとも、やはり自分で決めたことにはならないのだと思います。ウィンストンの命日は、奇しくも父親のランドルフ・チャーチルの命日ときっちり符合しました。伝記を紐解いて、不思議な感慨に耽ってしまうのはまずこの偶然です。たとえウィンストン自身が必然だと嘯こうとも、ただの偶然です。偶然なのですが、ただならぬ偶然ではあります。

父からは敬。母からは情。人が人として生きていくために知ることはまずこういうことです。ウィンストンは、父を意識し、父を尊敬してその生涯を駆けぬけています。いちばん自分を評価してほしかったのは、父でした。私からすれば、ランドルフ・チャーチルに微塵の魅力も感じませんが、そういう問題ではないようです。ウィンストンの息子も、ランドルフ。甘やかして育ててしまい、こちらのランドルフは、父の伝記の着手にとりかかりましたが、すぐに健康を害して死にます。ウィンストンのようなスタイルで酒や煙草を嗜むということをマスターできなかった男の末路です。後継のマーティン・ギルバートが、ウィンストンの足跡をあますところなく後世に伝えようとしています。ところでウィンストンの孫は、ウィンストンです。こちらのウィンストン・チャーチルが、1965年1月30日の国葬を感動的に綴っています。『祖父チャーチルと私』という邦訳があります。

ウィンストンの生涯をみるだけでも、数（運命）とはなんぞや、と思わずにはいられません。



## 敵として。

---

いざ兇等よ戦うなかれ戦わば勝つべきものぞゆめな忘れそ -東郷茂徳

もしも英国に生まれていたら、いったいウィンストンをどのように見ているのでしょうか。私は日本人なので、その感覚はついにわかりません。できることなら、日本人としてふたたび生をうけたいと思っているので、私のアングロフィルも、まあその程度のもです。本音をいえば、そのぐらいが健全かと。自国の悪口に余念がなく、ただ外国にかぶれている人は、人として倒錯しています。

なぜ英国史に魅了されるのかといえ、すぐれた英国の歴史家たちがいくらでもいるからです。これから英国の地位が下がろうとも、歴史家たちの筆は祖国の安寧におおいに貢献するはず。そのなかでチャーチルがどのように再生していくのか、たのしみでなりません。他国から他者としてウィンストンをながめる風景は、なかなか刺激的です。英米中心史観からの脱却が日本には必要ですが、そのためにはまず英米史を知らなければなりません。ウィンストンに注目するに如くはなし。

とくに日本の戦争に関与してくる時代ともなれば、私はウィンストンの物語を穏やかに読むことができません。敵としてのチャーチルを意識せざるをえないからです。それでいいのだと思います。敵としてウィンストンに突撃し、そこからなにかを学び、あわよくば友人になろうという魂胆です。死者との対話は、生きているものの務めです。外国人を友にしたければ、歴史のなかに還るのがいちばんです。チャーチルの文献を渉猟する行為は、私にとって、人生の退屈と闘う最良のそれというわけです。

## ウィンストンのすすめ。

---

コワリョーフは会堂の外へ出た。ちょうど好い時刻で、陽はさんさんとして輝いており、ネフスキイ通りは黒山のような人出であった。婦人連も、まるで洪水のように押し流されている。 -ゴゴリ「鼻」

ウィンストンとつきあうことのメリットをランダムにいくつか。

一、政治不信という概念を忘れられる。二、魅力的でない政治家がますます魅力的でなくなる。三、政治家を観察することは、ほんらいはおもしろいことだと発見。四、政治家の嘘について具体的に学べる。五、政治家の悪口をいう時間よりも、たたえるべき政治家をさがす時間を大切にしたいくなる。六、ウィンストンを批判すると、ますます不愉快になる、というようなことにはならない。七、品格とキャラクターという概念がきれいに一致する男だとわかる。八、なかなか信用されない誤解されやすいタイプでも政治家として大成することもあるらしい。九、やはり努力家であったことを知る。十、なのに怠惰なところもあり、それが健康の維持につながっていたように思えるところがさすがだなと。

11；日本でのチャーチル関連の書籍は少なすぎるので気楽に書ける。12；英語圏では毎年何点ものチャーチル関連の本が出版されるので読むのに困らない。13；というよりも、むしろウィンストン自身が書いたものをすべて読破するだけでも一苦勞。14；さらにいえば、マーティン・ギルバートによるチャーチル関連の書物を蒐集し通読するだけでも何年もかかる。15；ウィンストンの演説文だけでも相当あり、たとえばことばの息づかいを学べる。16；チャーチル批判をいくら読んでみても、ウィンストンの地位はまったくゆるがないところが痛快。17；ウィンストンをどのように評価しているかによって、その人物の価値観や歴史観がすこしわかる。18；政治家批判のさい、ヒトラーがよく利用されるが、政治家をほめるさいのチャーチルはなかなか登場しないので、そろそろそういう時代が日本にも来ているような気がする。もっとも、政治家非難のさいのチャーチルはたまにある。19；車に撥ねられないように気をつけて横断するようになる。20；スコッチの飲みすぎに気をつけよう。

二十一、輕妙洒脱。二十二、ながいモノローグ。二十三、デブデモハゲデモ。二十四、しつこいほどのねばりづよさ。二十五、洒々落々。二十六、豪放磊落。二十七、それでいてディテールにこだわる大宰相。二十八、落選しがちな議員。二十八、こわいぐらいの自信家。二十九、意外と涙もろい。三十、敵にまわすといやなやつ、味方にすれば～。 などなど、歴史をとおして垣間見れます。

三十一、人生が退屈であることをちょくちょく忘れさせてくれる。三十二、たくさん読んで誰かにはなしてすこし書きたくなる。三十三、共同体のなかでのわがままぶりを政治家としてみごとに実践！

このように、ウィンストンとつきあうといいことだらけになります。デメリットもあるにはありますが、それは割愛...

## 男の背中。

---

ある少女： おっちゃん、なにたそがれてるん？

ウィンストン： Oh, your little girl.

ある少女： おっちゃん誰なん？

ウィンストン： Are you Japanese？

ある少女： うん日本人。日本語しゃべれる？

ウィンストン： I don't speak Japanese, girl.

ある少女： うちも英語は知らん。おっちゃんてえらい人？

ウィンストン： You have no knowledge of Winston Churchill.

ある少女： ウィンストン・チャーلز？ 知らんわ...

ウィンストン： Why not study English? Why not read my books?

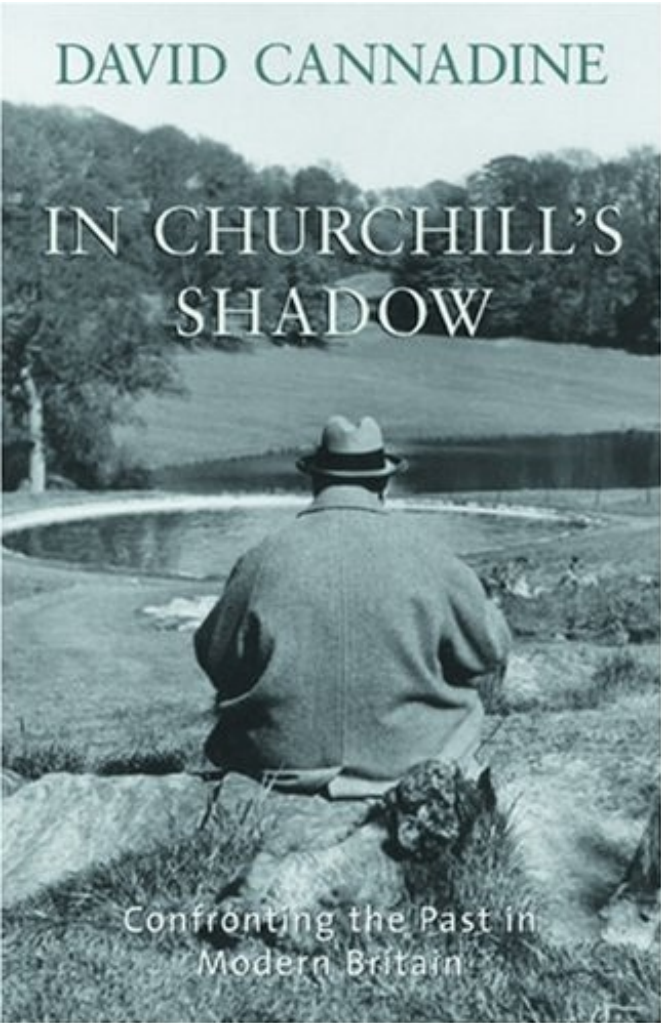
ある少女： 英語...。おっちゃんこそ、日本語勉強したらええのに。。

ウィンストン： ...。

DAVID CANNADINE

IN CHURCHILL'S  
SHADOW

Confronting the Past in  
Modern Britain

A black and white photograph of a man in a hat and jacket sitting on a rock, looking out over a landscape with a pond and trees. The man is seen from behind, wearing a wide-brimmed hat and a heavy jacket. He is sitting on a large, light-colored rock. In the background, there is a pond or a small lake, surrounded by trees and a grassy area. The overall scene is a rural, natural setting.

## ウィンストン燦燦

<http://p.booklog.jp/book/29919>

著者：そーかい

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sokai7/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/29919>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/29919>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.